

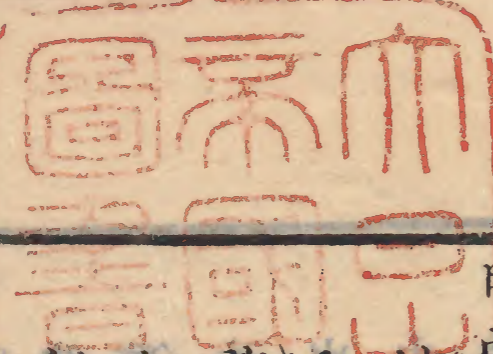
利根川畷志

			二九〇〇	和書門
六冊	二架	三函	〇號	類

庫文閣内			
七四函	三三〇〇		和書
二架	三冊	〇號	類

内閣文庫	
番號	和 22900
冊數	6 (4)
函號	174 117





利根川圖志卷四

明治十七年購求

下總 布川 赤松宗旦 義知 著

印幡沼 いんぱんぬま 印幡郡 いんぱんぐん 其水上 そのみづの上 船尾村 ふねむら 神崎橋 かみざきばし 落 おち 一方 いっぽう 八

佐倉 さくら の城 のしろ 山 のやま をめぐりて鹿嶋橋 かじまばし より落 おち つ下 した 八安食 やちやく より利根川

不合 あはは 凡 たゞ 長 なが さ七里 しちり 廣 ひろ さ二里 にり 許 ゆる 沼 ぬま の中 なか 不 な 佐 さ 久 く 知 ち 穴 あな 子 こ 花嶋山 はなじまやま

等 ら あり其外 そのほか 古跡 こせき 多 おほ し佐倉風土記 さくらかぜつちき 云 い 倭俗 やまと 曰 い 沮澤 しゆさく 為 な 沼 ぬま 此 こゝ 亦 また 舊 ふる 曰 い

印幡沼 いんぱんぬま 又 また 曰 い 印幡湖 いんぱんこ 此 こゝ 江 え 也 なり 首尾 くびおし 四十餘里 しじゆり 有 あ 舟楫 ふね 之 の 便 べん 多 おほ 魚 いさな 鱖 なまこ 之 の

利 と 而 して 下 を 引 ひ 海潮 うみうしほ 宜 よろ 言 い 江 え 而 して 或 ある 沼 ぬま 或 ある 湖 こ 者 なり 鄉語 むらじゆ 爾 を 故 ゆゑ 今 いま 以 もつ 江 え 稱 なづ 焉 なり 大江 おほなへ

千 ち 里 り 有 あ 歌 うた 曰 い 志 し 毛 も 鬪 む 佐 さ 乃 すなは 伊波 いば 能 よ 守 まも 羅 ら 奈 な 微 こ 多 おほ 豆 まめ 良 よし 之 の 目 め 不 な 那 な 比 ひ 等 ら

佐 さ 玉 たま 伎 ぎ 可 か 羅 ら 艘 ふね 於 に 須 す 奈 な 李 り 其 その 稱 なづ 浦 うら 者 なり 盖 さへ 亦 また 尚 なほ 矣 なり 其 その 源 みなもと 出 い 於 に 神 かみ 船 ふね 尾 おし 之 の

西 にし 北 きた 受 う 二 に 小 こ 流 なが 一 いつ 自 よ 戸 と 神 かみ 佐 さ 山 やま 之 の 間 ま 一 いつ 自 よ 神 かみ 平 へい 戸 と 之 の 間 ま 流 なが 會 あ 于 に 船 ふね 尾 おし 之 の

下 した 廣 ひろ 可 か 一 いつ 里 り 而 して 東 あづま 流 なが 六 む 七 しち 里 り 至 いた 師 し 戸 と 會 あ 於 に 鹿嶋橋 かじまばし 下 した 流 なが 而 して 廣 ひろ 可 か 二 に 里 り

印湖

又東少北流七八里而至平賀自此北折彌張大而瀦廣袤十餘里
浸於印幡埴生二郡而北過安食今為燕尾以入利根川其汎濫之
患常在巽風而未必在潦水為蓋利根川東南朝海若遭巽風帶雨
則自海口吹上而水逆行溢入于此焉耳江之為景不宜于平者蘆
荻遮望也宜于登臨矣其登臨者平賀為佳飯野次之烟收水澄一
鑑萬頃環浦之山如揖如坐如走如駐翠屏畫閣者平賀之望也浩
浩大江一條鎔銀以為長帶水外綠洲禽飛馬風和斜日而面富士
峯于且千里表者飯野之眺也凡環江村三十餘佐山也神也保品
也青管也先崎也臼井也江原也角來也佐倉也山崎也下根也飯
野也土浮也萩山也飯田也大佐倉也柏木也下方也北須賀也八
代也大竹也酒直也安食也俱連印東而起於乾繞干兒離震以終
于坎焉船尾也松崎也吉田也巖戸也師戸也鎌刈也瀬戸也山田
也平賀也吉高也松蟲也萩原也中根也笠神埴原也卜枕也皆連

印西而起終回繞效印東者焉吉高東可二里江中有二穴一北一
南相違四五十步徑各可五十丈水色深玄底不可測旋渦甚急舳
艫難過村民謂之佐久知穴佐久知鱒魚之小者時集于此穴下網
取之無數故名焉北須賀以北江上夏間陰濕之夜火出水中離水
數尺非漁火非鬼火須臾分散或五六十或百數十若往若來或索
或聚乍遠乍近又高又低以窮數時而滅焉亦江上一奇也
回國雜記標註卷上云九月廿八日稻穗の別當坊ふく湖水と
なぐ免と文明十八年丙午也

山色湖光殊又窮 鄉書曾不託飛鴻

砧聲近報孤村晚 旅懷何堪憂患躬

又云々小春れあふささのどろふ侍をれとみま
いふの湖水あうらびく舟のうちみて酒ふと真行し侍りき
富士の糸湖小うつれる心とそふくよむとさよし申られバ

笈の内より今捕一イナ十四五斗り取出し細補飾小刀あり板
 子の上めて料理す予是を食さるゝ常の魚とハ更りりその
 美味ある更いふべからば一鉢蒸はると直死するゆゑ一時の向も活置こと叶た故ハ
川辺の者と云ふ漁師ふらでハ生くる魚を食更りて
 酒吞あくら漁師のいひくゝハおの佐久知宛ハ何処の漁場と
 さだめあらば誰が細打ても宜しけれど手あれぬものハ
 一足の魚もえがく故ハ手馴しその細打てその一網の魚を
 得さるるがもとよりの習ハありと語りこの者ともハ年々夏に至り
さか死すり出漁師ふ
其昼夜のころをせよられせ
漁業のころをせよられせさて時刻もよろしとて漁師一人何とて手
 どりそつと船先の方ふりり程をうぐひあをを投ぐるハ
 魚ハ細の龍頭の所へ真白ハ集りて見ゆればをえりて人々踊り
 上りて賞賛しぬさてこの一網の魚のころらば我等ふあたへり
 おめれいゝとさび早速家ハ持ちり数て見しハ一百二
 三十斗有る魚の沢山集る更是をて知るべし

鳥見ヶ岳

印西萩原村ハあり鳥見大明神の社あり佐倉風土記
 云所祭饒速日命相殿神御炊屋姫命味間見命也有永禄中之梁
 簡元禄中社司石井氏請吉田兼敬卿奉正一位焉
 常陸風土記云鳥見岳是ナリ

松蟲皇女廟

松虫村松蟲寺ハあり寺門の二王端慶作本尊七佛藥
 師如来行基僧正作人皇四十五代聖武皇帝天平年中の御建立
 とし藥師堂の後ろの方ハ松夷皇女の墳ありその側ハ社あり
 俚人姫宮と稱す松夷姫ハ聖武天皇茅三の皇女或ハ宮女とも
云傳ふ癩
 と病きてとくハ棄らる自らうりては藥師佛を祈りて愈更
 を得ぬハ後帝都ハ遷幸して薨ト給ふ而して後御骨を當山ハ
 安置せといひ傳ふ

松蟲の陳場

松蟲村野の出口ハありハ常州河内郡足高の城主
 岡見中務少輔信貞の長臣栗林下總守義長佐倉の千葉を責ん

と軍勢を佳し布川より利根川を渡し布佐の砦に押への兵
と置笠神小林と戦ひ而して此所を陳せ
常總軍記卷二十云かくて義長兼てハ瀬戸へ出て沼をめぐりて
出水より佐倉へ押つけ有無の合戦をせべりと号令せしめど
ふ松虫の墓に陳し人あづまりて義長心あづりふ軍氣天文
せうんがみふ義長大ふや海老原次郎と近付東の方
へゆびさして今佐倉の方へつて一行の赤氣西北に露く
我察せふ千葉勝胤今度義長此道と押来る事を知て道筋を
堅固の要害を構へ當手の勢を平間とらせ日救を経る其内不
引ちうへて香取郡へ打出小見川及び高田松岸を越え利根川
を渡つて常陸へ逆寄せへる斗策此雲瑞に歴然とて去バ此所
小心を迷して香取郡より攻入らまんハ以の外の大事成へ
潜ふ兵を引取て高田不出て敵兵を防へるあて去あから千葉

佐倉の様子を知り得がごとし右細作を出して是をさぐるに雖
ども分明ならぬ如何せんと思ふ我今ト筮して是を見るに
雷澤歸妹の卦也是味方ふよき助けの人来るべし中畧あつた
尾張國小河の住人小河左馬次重知といふ者あり彼ハ清和源
氏の正統左馬頭滿政の後胤にして名家の末ありしに尤知謀
を兼備しいさご年若うとてさへ武者修行として関東へ下り
上野下野を経て常陸の水戸に有る夫より千葉に來る其時ハ
千葉も静うあてられバ武をこぐく事も遠ざかり暫く足を
止むべかりとるが千葉の老臣原式部小河を臣下とせんと二
千石を河さかべと也しが小河が心ふ叶り陪臣と呼まん
其本國の聞えものうぐありと思ひ是を辞して東海道を上ら
んと思ひはるが岡見の老臣遠藤又右衛門ハ相知る者あり
しが今度義長といふ者を軍師として兵を千葉へ出さし

はさへ聞くたとひ遠藤此軍中ふららばと知る人のよき
あも尋問せざると残り多しゆれ彼陳ふ至らば遠藤が安否
え知るべしと思ひしうバ印西へ渡り斯て義長が陳ふ来りて
遠藤を尋ねしふ二の手は大将として此陳ふありなきを小河
大ふよろこび對面してむろし今の物語せしが遠藤志ばらく
小河を止て義長ふ委細と物語に義長さてハ味方ふ吉瑞有と
見えしハ小河ふらんと思ひ對面をべしと有なきバ小河と辞
をべきふあらねバ遠藤と共に義長ふ本陳へ行て謁したるふ
義長ハ小河の姿を見るふ其長六尺餘ふして年末ご三十ふた
らば勇猛無比なき男なきハ頼もしく思ひ酒あるとふして後
千葉はよろまきと尋ねるふ小河申るふハ千葉勝胤當時印幡郡
佐倉不在城せり斯て其近郷盡く守衛と置たりしと下總香取
郡を籙下として右家臣と交へて堅む滑川ふ織田右京助崎ふ

内田信濃寺臺ふ貝室加賀大倉ふ二条大内蔵小見川ふ粟飯原
左衛門小見川越前守千葉東郡ハ一圓ふ東の六郎是又隨一の
連枝ふして強勢の者あも其上六郎大カあらびなく早業の名
譽荒馬乗ふして大太刀を得たり弓ハ楚の揚由を欺き大剛ふ
して流をあつけ寔ふ大将の器ある事千葉ふ肩をあはる者
更ふふし又米の井ハ木村能登吉沼ハ地涌監物長沼ハ大野修
理原坂ハ平外記荒海ふハ荒海左衛門大竹ふ大竹次郎兵衛飯
岡ふ飯岡勘解由馬加ふ馬加七郎船橋ふ布施五郎鷺沼ふ木村
十太夫大須賀ふ大須賀四郎是勝胤ガ圓城寺ふ村田筑後圓城
寺備前村田臺ふ村田兵衛山部ふ山部八郎左衛門森戸ふハ森
戸五郎宮戸ふ宮本若狭川村ふ川村大炊岩尾崎ふ只越義濃神
崎ふ大和太郎左衛門出水ふ大谷半左衛門藤崎ふ藤崎隼人同
四郎左衛門飯高ふ飯高播磨同十郎鏑木ふ鏑木日向同次郎左

衛門櫻井さくらい式部神大寺原しんたいじやうげん石上外記石橋いしかわ石橋大膳おおい同
若狹わかた小石橋こいしかわ伊藤平次いとうへいじ左衛門同與市郎よしみちらう高井灘たかゐのし大野弥左衛門おののやまざゑもん
門吹上かぜあが風間平右衛門かまへいざゑもん同平十郎たいへいじちらう一今日いちこんにち高野内たかのうち二今日ふたこんにち三
今日こんにち同人どうじんあり木梨きなし木梨内きなしうち同善左衛門ぜんざゑもん森本もりもと森本平太夫もりもとへい
廣岡ひろおか廣岡縫殿ひろおかぬいどの青木あおき青木土佐あおきとさ伊能尾いののお伊能尾越前いののおえちぜん同勘解
由よしゆ同四郎どうしちらう左衛門ざゑもん伊能尾山いののおやま山崎主祝やまざきしゆしゆ金田かねだ金田刑部かねだけいぶ神々かみかみ廻
小神々こかみかみ廻丹波まわるとんぱ惣深そうしん惣深六弥そうしんろくや林はやし林飛彈はやしひでたま鳥井とりい鳥井筑後とりいちくご
同惣右衛門どうそうざゑもん其外そのほか藤田對馬ふじたつしま同縫殿どうぬいどの之武田のぶたけ武田ぶたけ允近ゆんちか芝田しばた宇右衛門うゑもん
久古主斗くこしゆと秋山内記あきやまうちき中野なかの中野なかの遠藤左兵衛とんどうざべゑ布鎌ふかま但馬たにま丸岡まるおか
喜き一いち同彦市どうひこいち垣生かきなり垣生大和かきなりたいわ迎むかひ瑳さな四郎しちらう宇津野うづの又市またいち宮小
四郎しちらう同圖書どうとくしゆ臼井うすい臼井次郎うすいじちらう成田なりた成田八郎なりたはちらう天野あまの天野弥太夫あまのやまたふ長澤
小倉こくら入道にせうだう同次郎どうじちらう右衛門ゑもん秋山あきやま蔵人くらひにん佐原さはら木内きのうち八郎はちらう左衛門ざゑもん高
橋藤兵衛たかはしとうべゑ小野傳おののつた八竹川やちくがは圖書とくしゆ飯田いひだ新八郎しんはちらう松崎まつざき久内くうち推名おしな推名

丹後岡野内たんごのくまの膳澤田ぜんざわだ五郎ごらう左衛門ざゑもん高橋たかはし八竹内兵部やちくのちべいぶ羽川はつがは四郎しちらう左
衛門ざゑもん田口たぐち小八田こはちだ刑部けいぶ其外そのほかあけてあけ難がた一いち又香取郡またかづのぐんの多古
高岡たかおか小舎こや弟あに千葉ちやうべ頼胤よりむねあり生實なまじゆより北きた八千葉やちやうべの内うち小こ一いち老臣らうしん
原式部はらしきぶ在城ざいじやうセリせりよよ安食やすけ小こ松田まつだ藤右衛門ふじゑもん大竹おほたけ小大竹こおほたけ平次
左衛門ざゑもん萩原はぎはら小萩原こはぎはら登弥太のぼりやまた吉高よしかう小吉高こよしかう代々だいだい吉橋よしかはし小吉橋こよしかはし中なかつ整ととの笹
川さか石見いしゑ其外そのほか松岸まつぎし本庄ほんじやう高田たかた以下いげてて其數そのかず五十八城いそはちじやう八十八館やそはちだん
砦とりで九十三餘くじゅうさんじゆあり然しかるる小今度こけだ香取郡かづのぐん出張しゆくちやうして高田たかたを渡り直わた
不利根川ふりねがはを越こて常陸つとむ小働こはたくべくべと評定へいぢやうの候けうなりなりととまま此所このところ小
陳ちん一いち給たまへん事こと詮せんふふるるべべ一いち若利根川わかしねがはと渡わた一いち常陸つとむへ乱らん入いせせハ
胸むねをを吹ふともとも甲斐かいあるあるまま一いち今度けだ香取かづ出張しゆくちやうの主將しゆしやうへ彼東かのあづま六郎ろくらう鎮
亂らんをを以もて惣轄そうかくとと一いち二条大蔵にじやうだいざう太夫たふ鳥居とりい筑後ちくご村田兵衛むらたべゑ次將じしやうとと
て一いち万餘騎まんじゆき差到さしとふふ中畧ちゆうりやく御評定ごへいぢやうははいいそそきき高田たかたへ陳ちんををう
つつされ然しかるるへへささ哉やと申まをなりなり義長ぎぢやう聞きててささそそ有あべべ一いちされ昨夜されさけ

天文を考へ尚ほ雲氣と見し小赤氣西北をつらぬくを
 其さざし也又ト筮せしむる小味方小たをけあるは卦を得
 是貴客の物語を聞へき善卦あり今ハ疑へくはそみやう
 小陳を高田に移して戦ふべし下略
 吉高代々城跡 吉高あり掛鼻といふ山の上あり東小印幡江
 を眼下小見おろし風景至て羨あり西小御門坂あり南小家老
 内和田屋鋪ありと云地名今猶存也其外口と唱ふる地名甚多し
 和田口南口西口北口丑口坂口野口向口向路口城田口殿田口
 向田口鶴巻口馬草田口等あり北小船戸南小藤田河岸あり是
 舟北須賀へ安能橋へ山田村へ行堤の中程あり
 吉高鮎 名物あり金色小し骨堅し肉もろりて味羨あり
 此鮎をとるふ一種の漁業あり冬の漁中一人小舟に乗
 り水浅き所を掉さし舟を踏て舟を左右へ蕩揺をぬの

浪音小おとろきて鮎の根小隠るその水中の濁るを見て
 手あて是を握るとる故ふてとる鮎といふ萬葉集のモブツツ
 カブナ是ありツカハ握
 カハボタル 俚言カハボタルといふ老れあり亡者の陰火
 する由形ち丸く大さ蹴鞠の如く光りハ螢火の色小似たり夏
 秋の夜あらはる雨の夜へ至て多し水王一二尺離れていくも出
 て遊行をる如し或ハ聚り或ハ散ト又ハ高くまゝ低くまゝ
 時ハ矢のごとく久雨の節ハ夜まぐ多く是とみるまゝ花嶋山
 へ龍燈の上ることありまゝ陰火龍燈のたゞひ種々の書小多
 く見ゆまゝと詳ありハ春暉夕見ありまゝと西遊記小ありまゝ
 筑紫のちらぬ火まゝと越後國新道村飯塚氏の咄しと牧之老人
 雪譜小出したる頸城郡米山の竜燈ありまゝ又一奇説を擧ぐ
 義知 壯年の頃印幡江の邊に吉高和名抄云 印幡郡吉高小ありまゝと死頃ハ五

月の未だ見えずに朋友來りて云々。今宵はそらもきて
いと静あれば慰む釣に行べいとひびくるゆゑ。予も幸の事
あると思ひ早速仕度とて二人連立河岸へ行手なく舟
舟ふらり乗江の半ふ至り朋友の舟と十間を隔て掉つと
立舟と繋ぎ釣をたれて居あらず。小寂早子刻ともおぼしき
頃俄に空より曇り朦朧として物さびしく程なく大風吹起り
雨降いたし誠ふまんの闇とあり十間斗もあられ居ある朋友
の舟も見えぬなりぬ。おはひつとと思ふ内幽ふ遠水中より
一つの青き大閃々と焚あがりぬ。是れあへうの亡者のかたを
んと見居たるかたんと引かぬ。近付來りぬ。逃ぐらんと思
へとも風たよなき。舟を動かし事もあらぬ。衣服はぬきそ戰
慄さるふ心をまづ免朋友と呼んとさきと更ふ声も出で何如うハ
せんとならる。内かたはボタルへさかぬの船さきふ乗たる

ふはつあはトと思へともさきさやうなく。目をとちて心
ふ念佛さるのこある。暫して雨や風えちと静まりぬれハハ
はぐと目張開きえさる。さかハボタルハ何處へう消うせ空
え少し晴て朋友の舟えとの處ふ居あり。これとたえとせそこ
えといご。今のかハボタル見しやと問へば。我もみなれ共
おそろしき小物も云はれと答ふ。やうく人心地付て早々我家
ふらり來りぬ。翌朝漁師とも大勢居たる所あて右の咄しをく
そく物語せし獵師とも云々。其くらゐの事ハ度々の
夏あり。禁ハ一昨夜漁ふ出し彼かハボタル我ら舟ふ乗たり
其時ハ大勢ゆゑおそろしと思はれ。舟掉を以てからふ任せ
打あさし。所碎け散て舟一面ふ火とあり塗付ある如くその
鯉さ壁ふなす物ふ。其質油れ如く阿膠の如くぬるむ。心
くとして落む。みまぐ打寄りやうくと洗ひ落しぬと大勢の

物語なり。又其内一人の云々るへ。四五年以前の事あるがとき
或夜投網うら此艦漕不出し所彼カハポタルのつともふく
出来し舟近くふつくと飛走る。網とりハ剛氣の男ゆゑ此時
小声めて我ふささくを射を我もうふささながら舟残廻ら
うのカハポタル残追うけず。網とりハあさど小脇ふ引ら
う。舟の舳ささふ突立あがり手頃と見ささる。我と網残
投るをば按ふたがう。カハポタル一ツ残打かぶせぬ。其時
暈さまのせん方あく。網の中ハ一面ハ青た火とありぬ。く
て落次。のめんともささやうなく手ふてえみ洗ひを其手二三日
え暈めし。故一昨夜も大勢めて舟残洗ひ。が我ハ以前あり
て居ゆゑと云次手残付さう。とつひと大よ笑ひぬ。の
カハポタルとつふえれを生捕てその形質成あらハ。一ハ印播
江の獵師あるべし。

花嶋山

印播江の中ふあ。平賀村ハ属也。俗誤。離島。此島ハ舟めて渡り。由云傳ふま。今ハ田畑とあり。島の廻り

一里とつり。此絶頂ハむろ一寺あり。大日本寺とつ。今ハ不
動堂と籠り堂のこ残り。弘法大師護摩修行の古跡あり。とて
護摩檀塚。獨鉆水。東の方山のな。今ハ存在せ。山ハ十六峯ハ
谷ありと云。さて此山ハ登ま。西ハ富士南ハ佐倉の城山
将門山東ハ當りて成田山北を望め。筑波日光の山々。北須
賀村水神の洲寄ハ江の半ハ蛾眉を。往來の高瀬船ハ白帆
吹揚て八方ハ乗ち。數萬の漁舟ハ柳葉江にら。あさど
千勝万景應接する。不違あら。誠ハ北總第一の勝地あるべし。
湖ハ波う。多ハ蕎麥の花。梅磨

兩祈

文政初の頃印西の邊ふ名をト童と呼。禪宗の僧あり。年十
九歳ありとつり。元來何きの弟子ふり有ん。こ。漂泊し来り

て二三年ふ成ぬ。其性つらつて愚鈍なり。常ふ道路ふ嘯唄ひ宿を
需めず。樹下祠堂を栖とせ。三伏の暑月ふも綿入ぬのこと着て暑
とせぬ。蚤蚊といと宇。嚴冬素雪の寒さ夜も草物ふ半天一衣充腐の破
き衣へ常ふ腰ふまどひて故とむ食を與ふるふ二碗の外を食
つべ二碗食して後はいりある。珍味を出さとも更ふ手ふど丸
取らぬ。酒宴の席を嫌ひ又小童壯年のその代りらふ煙草ふ
火薬を交せ食物ふ蕃椒を混ト戯ふ。是とあたへ困るまじむ
が故なりとぞ。飲食の外一物をとむをいざさるへ實ふ愚直の者と
云べし。或年の夏此あさり大旱して利根川を初め所々の江沼
も渇水高瀬船の通路も絶え井の水枯さて國民の憂へ大うた
あゝん。是不依て地頭領主とむも諸寺諸山ふ仰せて祈らせられ
村々の農民も種々の事をふして雲あゝるが其驗ふし時ふら
れト童云なるへ印幡江の中ふる佐久知穴ふ竜神住とむき是

を頼み祈とふへ忽ち雨降庵し早々葦と作りてえさせよと云
所の者ども大ふ笑ひこの魯鈍あるを食坊主何事残知とら
る虚言と申出一人の心を欺くたゝんと叱りたればや
疑ふまふき我數年々の竜神と友たり。依て竜神とたのむの
法残知まりと更ふ聞入まむ。此事強て望みなれば所の者共え
長々の早魃あて困ト果たるをりあればまづ彼が意ふ任せ
とてト童が言葉ふ隨ひ佐久知穴の傍ら江の中らふ葦残作
てあたへぬト童是不注連と張り四方ふ青白赤黒の幣残建種
々の物を備へさくト童りの臺ふより突立あがと高き云なるハ
此度天災大旱魃あて國民の飢渴見るに忍びむ是不依て愚僧
ト童一七日の間飲食残断禁し佐久知穴の竜神ふ祈る希くハ
大雨と下し衆人の飢渴と救へ志老よ若七日ふ及んで雨降ら
むんば愚僧再び生て歸らぬ。佐久知穴へ身残投ト竜神の栖残

穢さんと云早てどつくと座一そのとも云り座禪の躰ふぞ
 見えふらる。所の者共是すぐの欺むらると思ひ居たるがこの
 誓文哉聞よりも大に驚き皆々あんとくらしてゐたをより。儲
 ト童雪哉初老一より乃中を七日ふ及びびれどもあらずえええ
 々を我ト童が死る日なきと皆々案ト煩る所のト童ハ國の憂
 民の苦難救はんとな命を懸ての祈るなきバその至誠の感ふ
 や有らん。其日午刻より俄に黒雲舞起り雨降出。追々篠とほく如く車
 軸を流してふらふらなれば。所此この共大に悦び長ぐの飢渴の苦
 一今一時小蘓生一なる心地ありとそ踊り上つてよろこびあへり。
 夫よりのト童へ何を恩賞をべきと相談せし元より無
 欲の僧ふして金錢ハ手ふたも取らずニ椀の食を乞のこふて
 心小望こるこふ衣小麻の衣と謝りたりとぞ。斯てト童ハ五七日
 此邊を漂流せし。それより何地へ行るらん曾て眼ふ掛ら
 ず所のども甚たさき哉奇ありとて疑はざるものへあり

三三三

瀬戸渡 土浮瀬戸の間あり佐倉風土記小水上三百九十丈と有

同書関宿路の條小在佐倉乾驛十佐倉至瀬戸ハ里此間有土浮
 庵至木下六里木下至布川六里此間有利根川布川至小文間登
 基宿守谷經七野川過内守谷岩井百戸而達関宿ハ町

印西産物 筍 蕨 茯苓 刺古松根 從 鑿 之 鍾 初 蕈 所 出 種
 松露 脆味 羨氣 如 松 葉 或 曰 陳 仁 玉 菌 謹 所 謂 麥 蕈 者 是 也 未 詳 是
 否 松 露 小 二 種 有 米 松 露 云 色 白 一 種 柔 軟 者 粟 松

露とのふり色黄崩を帯て堅一是下品あり又二十年以前までハ
 猪鹿兔ふと甚だ多うり一近年一足そこるこふ一
 師戸渡 師戸臼井の間あり佐倉風土記小水上三百九十丈と云
 きたり

巖戸壘 岩戸村ふあり佐倉風土記云距佐倉西北八里一丁岩戸
 五郎胤安居之志津胤氏攻之家族皆死後頗有鬼哭燐火之怪白

印西

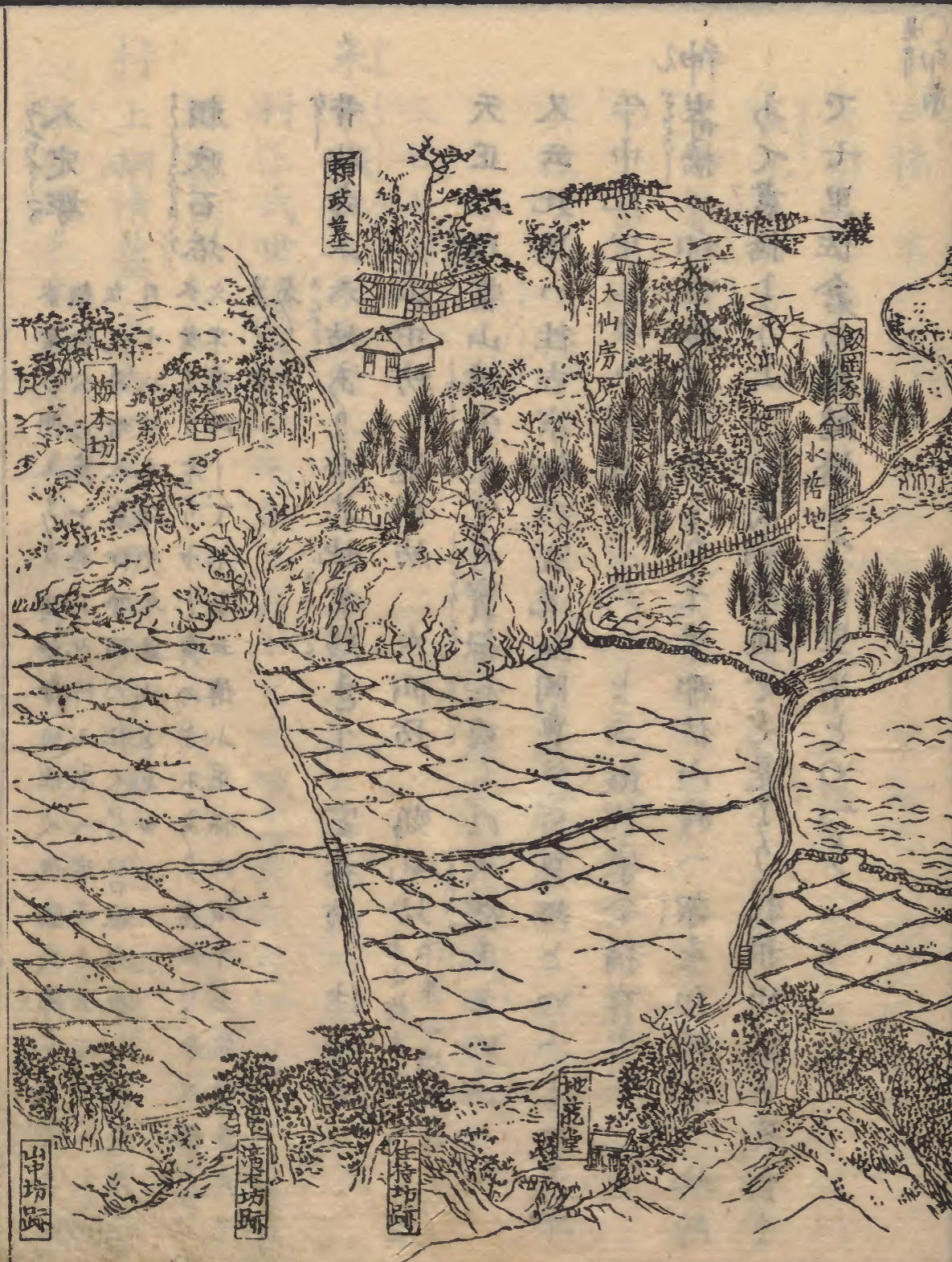
十四

井園應寺僧誦經止之因建寺今西福寺即是而其堂前紅梅則記
 胤安父子及妻所自殺處云東國戰記所謂岩戸城主岩戸五郎與
 吉田渡吉田より保品へ渡り米本茅田と經大和田新田舟橋小達也
 源頼政塚結縁寺村にあり佐倉風土記云傳治兼之胤頼政敗死
 于山城宇治遺命於其家士唱競二人曰負吾頭牽吾馬向東國去
 吾欲止處當重必座其地期以五旬過期而無驗則棄之二十奉囑
 東行二十日而至此覺甚重遂座封之植狗骨樹且建堂二七俱為
 僧居此既而馬斃埋之栽櫻號名馬墳又有雞墳在桑橋距家南十里許
 此亦頼政所畜來此而漬云按唱競東去不見于平家物語盛衰記
 等但頼政首座于下總古河在口碑而事似此所傳然不審孰是
 焉更有一說頼政弟深栖三郎光重其子陵助頼重共居下總九郎
 義經小年来此俟金賣橋次而往陸奥國事見于平治物語而橋次
 所寄之佛具在隣村瀧村龍水寺又近村中根濱印播江處有橋次

兄弟墳而傳其為盜所殺則頼重之居必在此邊今日御所柵者蓋
 近是焉所謂墓及堂似於頼重之所建恐後人彼此附會為之說耳
 併記意見以俟重得明徵矣

柳晴天山結縁寺八人皇四十五代聖武天皇神龜年中行基僧正
 の草創と云本堂南向六間四面本尊阿彌陀佛一行基僧正の作
 側小金像の不動尊と安置云御丈二尺餘嘉元元年九月十五日と云願主推律師龍尊と云
 鑄あり新義直言曰井實藏院末寺あり境内小花井戸扇の芝あ
 り鐘出現の池ハ本堂の向小あり一説ハ其後治兼の兵乱小源
 三位頼政平家の為小生害一從臣下總國の住人下河邊村藤三
 郎清恒と云者御首を肩來り此所小葬り奉り別髪して一字茂
 建給仕したまふといふ

頼政塚本堂より辰巳の方三斗山の上小有名馬塚と云い公役を其木と云ふあり櫻の大木有て道路を覆



印西

十六



入定塚

本堂の側あり傳伊勢国住人佐藤民部といふ者の娘
頼政公の墓と尋ね此所に入定と云石碑不大比
立尼善智入定伊勢国の住人口口娘大永六丙戌年二
月十八日享保九年造立と見ゆ

頼政石塔

本堂より在り少真の方あり高四尺余五輪あり
文字磨減して不令云傳小正保の頃井上筑後侯建ら
るありと

昔此寺小六坊あり今其地名残きり

安養坊 住持坊

山中坊

瀧本坊

大仙坊

鷲見坊

古く極本坊といふ由
治兼の頃斯改といふ

天正の頃當山焼失して寺寶縁起残らば灰燼とといふ

又云此里へ往古京都の官流飯岡豊後守尊經といふもの天平

年中此里小來り開發せし地也と云飯岡家今猶存す

神寄橋

印幡郡船尾村より千葉郡佐山村へ架を印幡江へ此所

みて盡橋より上へ高瀬船通せど是より利根川落口安食ま

で七里佐倉の鹿嶋橋まで四里半とつり

○是印南

平戸橋

平戸神村の間小架を是より檢見川海迫掘割開發

天明五乙巳年四月の古繪圖平戸橋より檢見川海まで掘割

長九千六百廿六間四尺五寸床六間深三尺より六丈三尺七寸

まで新開反別三千百十三町五反一步余と見ゆ是後田沼侍從

の此事を與りて掘りぬきと終ふ事ふらばして止とぬ

其後天保十四癸卯年水野侯五家の大名ふ令して七月廿

三日より鐵初て掘りぬきと事ふらばして同閏九月二十

三日ふ止り

米本城跡

米本村小あり佐倉風土記云距佐倉西南三十里一六町

村上氏世據之永禄元年三月十三日城主民部大輔綱清自殺而

城廢焉

村上綱清墓

米本の長福寺小あり綱清へ民部大輔あり天文弘

治の間米本の城主たり永禄元年三月十三日自殺を同書

臼井城跡 臼井宿の臺ふあま。佐倉より一里餘西北の方あり予
一日臼井ふる大川源五右工門書成の許と訪ひて臼井の城跡
を問ふ書成筆をとりて今の有様を圖して予ふ示を則ち是を
北齋ふ縮図あきめて充ふ出まよ同所田應寺ふ傳ふ了舊
記を見せらる用と摘て爰ふ出ま

三 臼井元祖傳

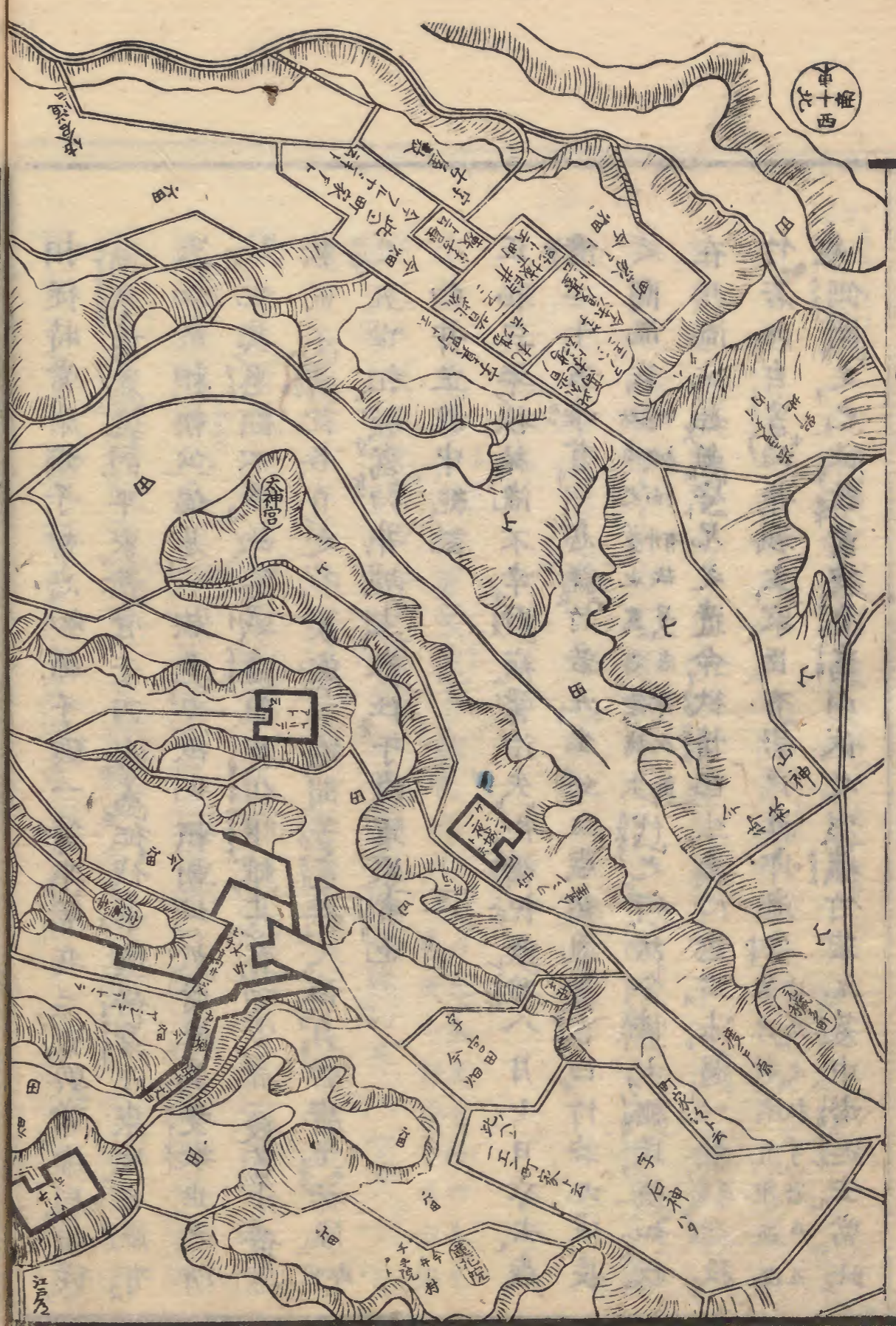
千葉公常兼分付三男常康于數箇之庄園角來、飯重、井、羽鳥、龜、栗山、長岡、内黒田、鍋
黒田、生谷、物井、下志津、上志津、爲臼井城主因之號臼井六郎次于千
津、上座、小竹、井野、青菅、先崎、爲臼井城主因之號臼井六郎次于千
葉、以上總公之大族也此臼井城也者前廣野、後湖水漫々左
右、谷廣而深山、繚而曲其雖、盡人力豈如是堅固哉有利自守無使
敵攻南望生谷之保月、松呈、千、年、瑞、北、願、印、幡、波、傳、萬、歲、之、響、城
郭周匝三里餘印西隔水一里許誠是名城也勝地也常康奉仕于
頼朝公有勲功頼朝公爲大庭敗軍馮千葉到下總常胤將一族以

相從時常康嫡子常忠郎孫子與一等平騎兵三百與常胤同相從
爾來前爲追討平家粉骨于西海爲征伐泰衡碎身于東國常胤有
天切於頼朝公偏是一族合力故也頼朝公於常胤其愛敬世之所
知也其恩顧不淺故餘威遍親族但恨雖其有功勞者一被書千葉一
族而不見記各自之名義譽不遠聞芳邑無久傳自常康至祐胤郎
凡五世相續爲臼井城主奉仕于將軍家者也

臼井正統中絶記

正和三年秋祐胤不幸臥病醫治失術禱祝無驗八月七日卒去歲
僅二十五唯有一息號竹若丸生年三歲祐胤遺言曰竹若丸成長
之間胤氏祐胤之弟也爲志津城主代之行法令憐士撫民須如我
在且胤氏始雖守兄之遺命欲情已生義心忽亡味過一歲私謀殺
竹若丸自爲臼井城主家臣有岩戸五郎胤安岩戸村名有印西胤
堅側聞之已欲殺前夜自爲山伏之形藏竹若丸篋中潛逃去當此

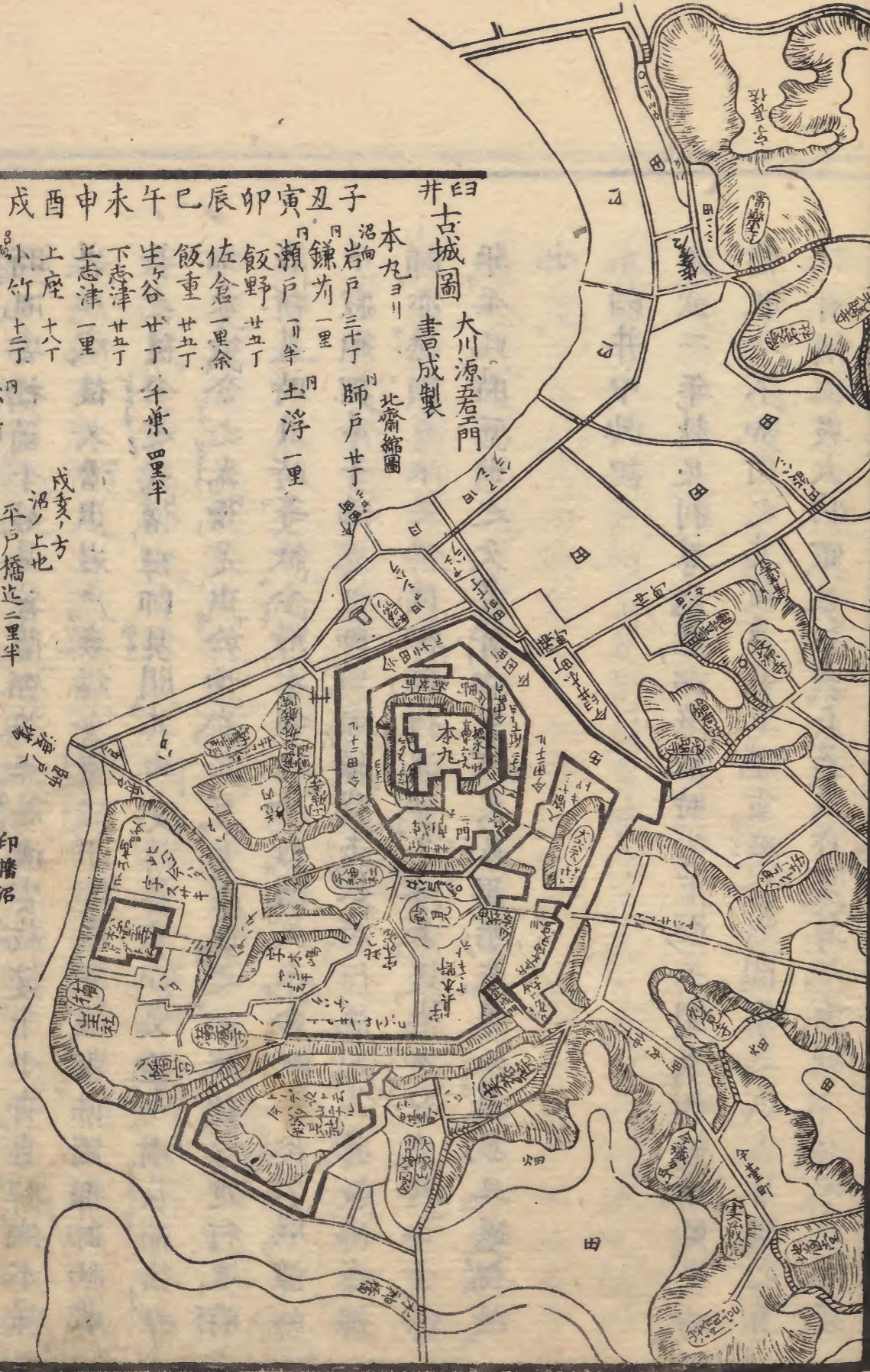
北十



井古城圖 大川源君三門 書成製

本丸ヨリ
 沼向 岩戸 三丁 師戸 廿丁
 鎌乃 一里 土浮 一里
 飯野 廿五丁
 佐倉 一里余
 飯重 廿五丁
 生谷 廿丁 千葉 四里半
 下志津 廿五丁
 上志津 一里
 上座 十八丁
 成 小竹 十三丁
 吉田 一里半 松崎 二里

戌亥方 沼ノ上也 平戸橋迄二里半



印膳沼

時亂安禱爾于妙見菩薩願其無恙亂安載於小舟自掉湖水歸
岩戶然後又潛出岩戶奔錄倉直詣于建長寺偏賴佛國禪師約成
長之後令之為僧禪師具聞其由愛憐養育如父於子漸長而後禪
師不欲令之為僧是出於恤孤之有實遂使之元服號左近行胤時
告訢基時貞時等欲令歸本領之地雖然天命歟事終不成禪師
亦寂預謂弟子佛真禪師曰願續我志扶持行胤因其遺教佛真禪
師亦恩顧厚不異佛國禪師行胤嘗辛味若送春迎秋空終二十餘
年至此時歷世之文書皆亡累代之珍器悉失是幻為孤且過禍故
也

臼井中興記

建武二年秋足利尊氏奉詔追討時行下向于關東相戰十餘度時
行敗北不知所之其後尊氏兵威重壓八州關東之武士皆屬之尊
氏自稱征夷大將軍奏討義貞義貞亦奏尊氏有逆心依之京都邊

騷動時佛真禪師與行胤相議曰尊氏卿者必主天下之器也此度
相從以抽軍忠可達著錦歸之望於是行胤將精兵五騎而屬于尊
氏卿其費用咸出于建長寺一山與佛真師之扶助且自首途日於
建長寺一山縉侶相集每朝誦尊勝陀羅尼百遍以祈行胤有戰功
而還本領地其功德豈徒然乎然後延元元年二月尊氏卿抵羽豐
嶋合戰失利敗走赴于筑紫菊池武俊率九羽之兵於筑前國多々
羅濱與尊氏卿對陳尊氏卿曰敵軍衆而強我兵寡而疲自運命今
日已窮矣於是行胤以為吾拔戰功遂素志正當今日戰場也不是
因神力何能之乎敬念我家守護神且禱之宇佐八幡及宰府天神
自誓曰若功不成則使我速戰死生而何為主從六騎直先登大破
菊池軍其勢絕比倫所謂如以礮投卵豈是人為實知神助菊池敗
比而後九州怕其兵威悉屬于尊氏卿其感悅不少乃約行胤云我
脫今申之危難偏在行胤之忠功後來天下歸掌中日再歸本領地

謝之其誓約不可變也天下已定之後曆應元年秋尊氏卿舉行胤
任從五位下行左近將監為臼井城主歸賜世所領之地且有可改
行胤為興胤之嚴命言是取再興廢家之義也又命千葉公貞胤曰
速可使胤氏志津退去而守為臣之禮義嗚呼天運無不復興胤再
為臼井城主其昌榮又如昔時謂之臼井中興也

圓應寺草創記并八幡宮天神祠造營

興胤再為臼井城主而後自心以為我中興之功成者元是佛國禪
師之撫育佛真禪師之扶助也其恩之不可忘也不唯是我永至子
孫亦猶可追憶於是招請佛真禪師住持于豆刈國清寺以為閑山
新立精舍山號瑞湖寺名圓應且寄附領地十之一興胤事佛真禪
師恰如子之於父晨省昏定所謂能竭其力者也寺與城隔一池為
之橋使其往來有使也又預自心期我若生子以其長先為僧嗣法
佛真禪師併是欲謝恩之有餘也

道菴和尚傳云興胤之長子曆應二年巳卯十月二十四日誕生

少為僧法嗣佛真禪師為圓應寺加焉多々羅濱戰功偏因神助故

奉勸請宇佐八幡宮及宰府天神于臼井長致報賽八幡宮有城南
其山号八幡山其寺号滿藏寺以為別當令掌神事八月十五日有
祭禮也興胤初相地于此時自以所携之楠樹枝植地曰若此楠樹
活而生葉以為靈神來格之證然後其樹繁茂碩今神前有是嗚呼
其妙不可測也又於城中草創管神祠修覆妙見堂以八月二十五
日祭管神以七月二十二日祭妙見自致如在之禮矣想夫興胤之
為人也其誠能感二神其勇忽挫三軍幸雖為中興之祖自處富貴
長記為郎當之身佗恤寒饑大抵以數件支平生之志行其可察也
此外舊記雖多○諸国主齊錄下總國禪宗小千石印端數并御圓應寺

大楠樹 右古城跡の内西北の隅小あり側小山王權現を祭る楠の
周圍五大餘一丈東の方へ九尺斗り隔てぬ一丈をりあり二
本あり枝の根付たる物ありと云り其奇あり支図と見て知べし

白井

大樟圖

周圍五丈餘
東方一丈餘



印南

四

廿二

むらゝ此樟のまゝとふ大蛇住て折々人と捕食し何人の退治
たりん其大蛇の皮ありとて方二三尺斗みて鱗ハ四文錢程
ある哉同所の寶藏寺傳へ持り予を見ゆを尋ひ如何
したりん近頃ハ見せむと云り

大田圖書墓 曰井圓應寺の西古城跡小あり舊記云備前守俊胤
前爲曰井城主時文明十一年己亥正月十八日太田道灌_{江戶城主}將
二階堂七黨等一萬餘騎兵渡市川來曰井圍城俊胤預聞知之故
設備侍馬千葉介孝胤引援兵來共守之道灌良將也俊胤亦良將
也彼此盡計畧攻守爭戰功相戰十餘度勝敗未決春過秋來長尾
之麾下數國之武士來共援守七月十五日大戰道灌之兵伏尸數
百弟太田圖書戰死道灌脫力攻軍失利敗北_{太田圖書墓有曰井}
_{地也里民有疾疫則祈之無不}自是俊胤声名高世間威風奮於國
_{應夫生有勇力者死有神力}中者也

おとつら 古城跡より東南の方一町斗あるまで田の中ふ石の

小祠あり 古ハ此邊と云里人おとつらと云の咳の出した人ま

此祠不焦椒とお茶を奉りて祈念をまは奇妙不治るといへり

その故ハ正和三年當城主曰井祐胤八月七日不幸ふて病死

年十五子息竹若丸僅ふ三歳祐胤の弟胤氏_{志津城主}遺言ふよつて

竹若丸の後見とある胤氏始めハ兄の遺言を守るといふとも

忽ち逆心を生し私ふ竹若丸を殺してつぐら曰井の城主と

あらん事を謀るあふおとつらと云り下女ありむやくも此

更を知りて岩戸五郎胤安_{印西岩戸城主}告ぐ胤安大に驚き自ら

山伏の姿ふつくり竹若丸を笈の中不藏し潜ふ逃きて鎌倉ふ

去り建長寺佛國禪師ふ養育を頼み生長の後本領の地ふ歸ら

るめんと欲すのち足利尊氏不屬して本領安堵せし曰井丸逆
將監興胤といひいへの竹若丸の更ありさて曰井の城あり

下女のおたつ。後見胤氏の密謀我岩戸五郎小告たる支願ハレ
一ヨ多胤氏大ニ怒リ已ニおつり我殺さんと云おつり危くも
その場どのが私小城とぬけ出印幡江のちとりある芦原の
中ニ隠る胤氏あくと追うけ捜し求むまとも曾てあまげん此時
おつり誤て咳とあつりいゝ胤氏不見付らま直小首と討ま
いとあり。里人甚く是とあいまこ其所へ石の祠と建てあまを
おつりさぬといふおつり咳とおそるま支此故あり。依て咳の
念願りあま支まこやう也といふ

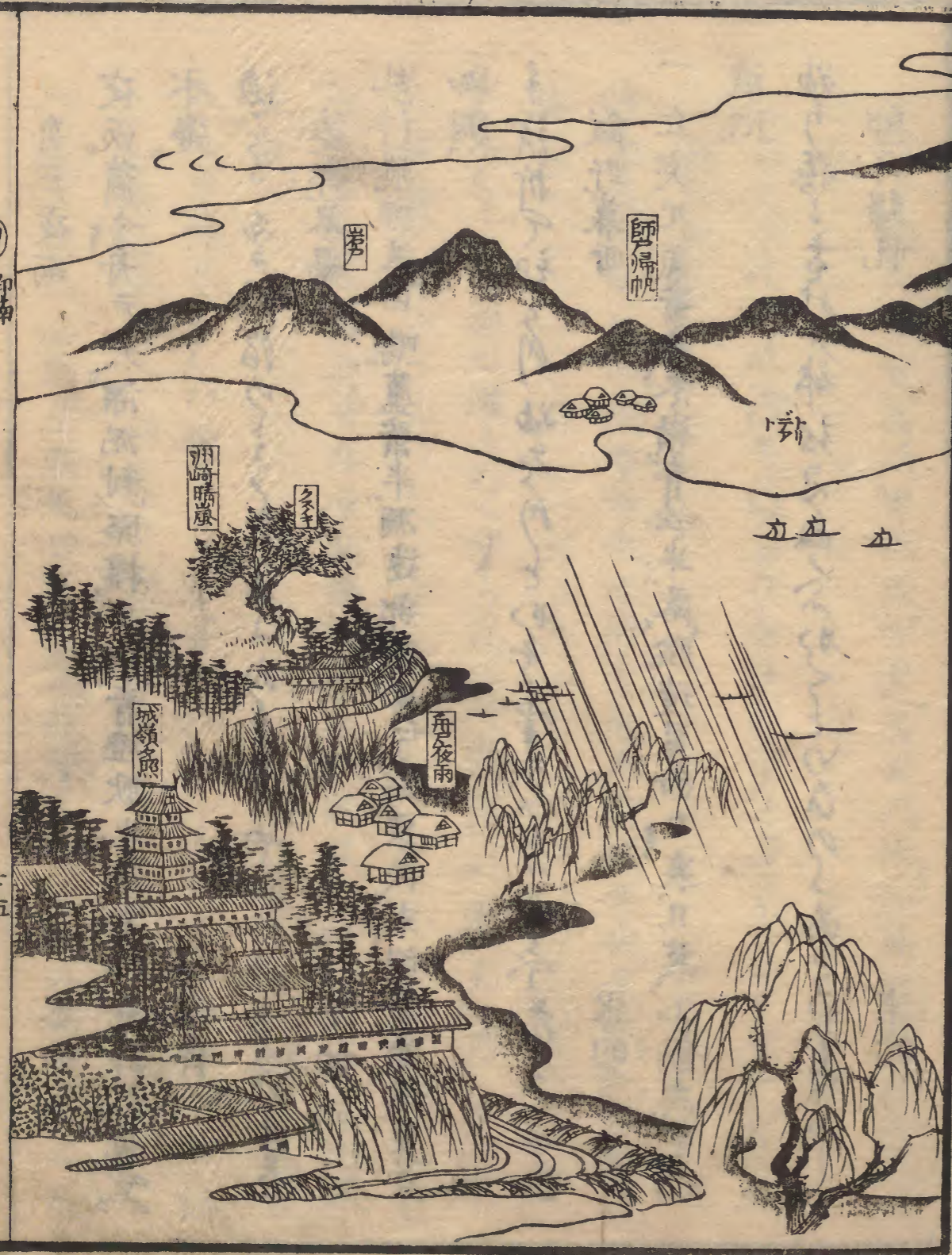
臼井八景 并序

下總國臼井郷瑞湖山圓應禪寺者中興城主平行胤有故所草創
之精舎也境地靈景色絶後負古城喬木脩竹園遶前抱湖水閑鷗
浴鳧浮淤晴好雨奇之有餘日涉夜遊不飽若試謂之趣東望飯野
霽雪西映舊基夕陽浮萍斷金玉流瀨戸挂影晴嵐吹瑟琴響洲崎

松聲光勝疎鐘報暮諸戸片帆促飯沙平水淺旅雁下遠部秋夜靜
雨暝漁翁繫舟戸岸加馬春待花木曙隻納竹陰涼遷喬鳥蒼嶺蟬
秋愛楓林酒冬和樵路之歌曠野蛩寒汀鷺大凡四時之佳興一日
之眺望變態萬千不遑枚舉者也 僕投老于寺前濯懷于湖水已五
年于茲矣寺之僧的公者方外舊識也乘興共消日於吟境訪寂復
終夜燈前因遣世之樂大且無窮公常恨言此多景地無詩人之詩
無歌人之歌者何其闕乎若不補之風流之罪也歟於是遂賦八景
以示之一唱則如坐夫勝地信所謂有聲之畫也後見此什人不可
無詩不可無歌公曰請亦題之見義豈默止漫綴詩歌以附佳作
之後自顧東施擲也竊要鮮蝦蟹一啖不可食者以釣金鱗所願在
焉時

元祿十一年十一月晦日

臼井隱士 信齋 叙



日前

洲崎晴嵐

掃盡江山絕嵐靄朝來子細見洲崎曝翅鷗鷺平沙上交葉葉淺
水濱

跋

犬凡有名無實者異方景物也茲吾蘭若門外瑞湖者不減瀟湘之
佳趣而永超洞庭之逸興矣然令古東夷之境而冠蓋無題艷志縉
素靡伸雅情故富景不富句貧吟不貧興嗟乎益有實無名者乎此
故與信齋徵君繕錄逸餘稗補闕漏而製作積而俱成於燈前之一
軸皆是翰林主人子黑之客卿不可得緘默者也焉時

元祿戊寅之冬

盲龜子

為之跋

鹿嶋橋

角來より佐倉田町へ架をかしぬ川といふ物井川の下
流にして是より東一里餘にして印播江小入る

物井川

佐倉風土記云在印播郡二源皆出上總國一自野呂來歷
田谷當北流十餘里而至坂戸一自吉倉來歷大谷流用草七曲巖

宮西流十餘里而至坂戸二水相會入馬渡橋下又西北流六里為

物井川出于小名木細流過鹿渡亦會于此而北流三里至羽鳥又

與高崎川會遂北流於城西過鹿嶋橋六七里而入印播江

高崎川

同書云二源一出於文違高松之間西流過下勝田橋下十
許里歷高崎南一出立沢南西流過飯積橋下坤流十餘里過高崎

北二水會于高崎西又西流過高岡歷真田橋下流于城南會于物

井川俱入江

佐倉

印播郡あり入口小鹿嶋橋あり橋と渡りて田町小入る田
町の中程右の方小田町御門に也海隣寺坂城上をハ海隣寺并

木下至了此所武家町多し。横町より左へ曲り新町有町弥勒町
本町本佐倉町とへて酒々井小至了。是より中川伐過て成田下

達

佐倉風土記云城在印播郡之中而稍近西嶋山其為形勢居高

陽歸濕阻要屏翳足乎遠邇面卯背酉左右子午前置市廛曰田町

高曰新町曰彌勒町曰本町曰本佐倉町曰酒々井町是曰佐倉六町

農賈相雜庶民庶安堵至京師八百有八里江戶七十九里東南至

西至武藏國界七十二里五十四里同文略昔千葉介平常胤より輔

胤二至ル近代々居千葉輔胤城ヲ佐倉郷將門山ニ移ス其後胤

富相鹿嶋山之要阨使邦胤移城于此築營未成邦胤卒其子重胤

幼冲天正十八年與北條氏共敗于相模國小田原城

東照大神祖賞鹿嶋山之形勝遂命利勝土城之慶長十六年春正

月十一日興功七年而成矣名佐倉城云

諸國圭齊錄下總國時宗部小三十石 印播郡佐倉郷 又三十石

同郡同郷 清光寺 と見えたり 海隣寺

土産 佐倉炭 葛葛 三度粟 蕨 初葦 松露

野駒

本佐倉 城趾あり今の佐倉小對一本佐倉といふ佐倉風土記小

千葉介輔胤千葉より城伐佐倉郷將門山小移スとありて注小

在、今、城、東、六、里、餘、堀、本、佐、倉、 と見えたり 東照大神祖廢將門山城文祿元

年封武田信吉于此建館於本佐倉大堀居之云と見えたり其後

慶長十六年鹿嶋山城今、佐、倉、城、小興功七年小一々成の後大堀も廢せ

しあり今、本、佐、倉、小、横、さ、て、大、堀、濱、宿、大、佐、倉、御、厩、小、と、あ、り、

諸國圭齊錄下總國曹洞宗部小二十石 印播郡大佐倉郷 勝胤寺

新義真言小二十石 同郡大佐倉郷 寶珠院 見えたり

將門大明神 將門山小あり平將門と祀了故小社と以て山の名

印南

共

もと云、石の鳥居あり銘と刻して曰 奉寄進將門山大明神石
 華表右兼應三 甲午天十一月日總劔印播郡佐倉城主從五位下
 堀田上野介紀朝臣正信持と見由例年八月三日祭禮相摸あり
 稻荷藤兵衛 佐倉より一里餘り東の方墨村の百姓ふもあのみ
 常不孤ととる事ふ妙と得あり故ふたうう藤兵衛といふ物類
不世俗さつ杯儀ありの神使ありといふ故不稱藤兵衛常不
荷の二字と音ふとふへてとううと稱ふるあるべし藤兵衛常不
 自分居屋鋪の裏ふブツチメ仕わけ也我梅らへ置此所へはき
 来りて捕と云ある時用夏ありて常不水戸へ往一帰もおふを
 けの原ふて狐不出逢一故ふの狐を欺一誘して我が家へつき
 帰り裏山のブツチメふわけて捕一とあり此道法十里ありり
 在てその内ふ舟渡三ヶ所ありといひりり或日藤兵衛千葉
 野と通とる時狐不出逢一故欺一來せてブツチメ懸んと
 志たりり古狐ゆゑ中ぐ事安くわくらん一兩日過てうの狐

隣家の畔ふ化て夜半のころ藤兵衛が家ふ来て表の戸を叩き
 藤兵衛くくブツチメへ狐がわかつたふと云ふ起よくと云
 ぐゆゑ藤兵衛ふと目残さふ一云るやう今夜ハブツチメ
 と懸をふつたり狐のわくるをさやうふ欺一おるおといひ
 きて偶然と寝て仕舞たり翌朝藤兵衛が云るハ夜辺隣の
 畔ブツチメふわつり行て見べ一といひける故家内の者
 起いで至り見ふ大なる古狐一疋かゝり居たり一とあり
藤兵衛めさうふとありの畔と狐ありと
さとり即智のあいさり誠ふ名人と云べ一やう或村ふ狐多く
 住て人家の鶏ふと捕り食ふゆゑ村内の若者ども相談して
 の藤兵衛とたのみ来り狐を捕る所見とさう一望とけきバ
 と心安さ夏ありあり狐を仕方一て捕て見を庵一とてふづ
 地蔵堂の庭の隅ふブツチメを仕つけ置我ハ山不到り此所へ
 狐と連来りてとる故各々ハ此堂の内ふて見物をべ一と表ふ

竹のまだきとさげ。大勢この内小隠を居たり。藤兵衛ハヤクテ支度どくのへて山小入。酒小酔とる声色みて大声あげさつ孫ハおらぬ。狐アーイたうり小をやくめさあひとやあど、さんぐ。小呼りのぶがら山中残多ぶりありらふ。程あく藤兵衛狐をつれ大酔の身ぶりみて、の堂の前小出来りぬ。腰小二尋をみり此繩とつけ、その先小鶏の死しゑると結ひ付ようくくとして引張りありく。狐ハ是と捕らんとして後小あり前小あり欠まへるをうて藤兵衛懐よりぶきを落と。大切の物と落しとり。うちくおやうめうぬ小食きてはゑるそのくうはくいはるるうい。おとくむとり言して。うれおはめと捨ひながら終ふたふき卧たり。狐ハそろくけいへより捨ひ残しおめめ残とり食ひ。又後の方へ廻りてこの鶏と曳く。藤兵衛目残覚し。足とあげて是と追ふ。かくさる度々あり。狐ハぬきて

側のブツチメ小近より去ハらくやうを伺ひ般々とふりへ這入幾度も白ひとうご終小餅とくハへて横とひ小飛つて其柏子小刎木をつきてブツチメ小うぬ其自由あるふと實小座舗の猫と嘲唾をるう如し予藤兵工小逢し時餅ハ何ふ哉と尋さきハ鼠の油揚ありといくり然るや佐倉の儒臣窪田某狐藤兵工の傳あり云城之東墨村有獵者名、藤兵工善捕狐人呼曰稻荷屋稻荷司穀神也或謂神即狐也或謂狐神所使故謂狐亦曰稻荷以藤兵工捕狐又轉曰稻荷屋云稻荷屋取狐不施置孛不持子銳爲製大技方丈餘設罾數所巨石如其上以助其重而少開其端支以小柱繫柱以繩繫繩以餅狐來食餅繩動柱仆從而要落焉以是狐多斃死又時持餅遠出携而所之嘗夜出有邑小吏山崎由良治者繼至焉大叱藤兵工曰藤兵工汝農而不爲農好害生數且狐性靈過於人狐不嘗害若其害狐如此而

不止得殃不少矣。言畢而去。藤兵工惶伏謝罪。既而思之。日余之出也。則以夜至也。則深山非人可至。乃豈老魅誑余乎。因往來談把所特餌投之。若有就而食者大喜。且投且行。既至覆所。則吏死于覆中久矣。藤爲帶。双杖在腰。而形已爲狐。尾曳脩々也。由良治爲吏。咸信行於民。故孤化其形。籍其威。以遏其害已也。於是藤兵工名聞乎近鄉。數里間野無在之跡矣。

窪田子曰。藤兵工之事可謂佐矣。然此余之所親聞見而可信者。藤兵工嘗云。城中多狐。使我掩殺數日。則積屍如山。快哉言也。夫城狐社崩人之所共惡。而不能去者。何也。彼其所託城社也。所負人主也。負人主之威。而託城社之固。以行其盪魅妖誑之術。雖有猛獒將垂尾聽命之不暇矣。尚安得而除之哉。然則藤兵工最爲之將如何。曰。餌而誘而殺之而已矣。

酒井町

佐倉六町の内あり佐倉明細記小天正十九辛卯年酒

酒井町建御入国初メテ、取立町ナレハ末久ク榮ユルヤウニ可仕旨 兩御所様ヨリ大久保重兵工へ仰付ラル、間酒々

井篠田大隅其外年寄共へ下廿ル、證文狀有之 中略 船著毛先

年ハ濱宿御湊ナリケル處新堀舟戸御取立下サレタリ 下略

佐倉風土記云 慶長中酒々井北開渠引印播江而著舟於酒々井

南三十一里寒川並連而在海畔此泛海西南五里達江戶最爲捷馬一大櫻濱達佐倉東六里泛印播江北八里而達江戶右從流而下者所之過木下歷閉宿南折沿市川入海而達江戶馬右從流而下者歷滑川金江津神崎佐原小見川而至鉦子入東海又右則過上總而通安房武藏左則通於常陸陸奥

中川 佐倉風土記云出自印播郡尾上乾流而十里過中川而入印

播江此處より印播江花鳥山の中

大佛頂寺 岩橋村小あり創造の年時詳ならず弘法大師大佛頂

の法と修めり處ありといふ諸國圭齊録下總國新義真言部云

十石 下岩橋村大佛頂寺と云

野馬取

救ヶ所あり其日小當りてハ遠近の老若男女郡集して見物也。佐倉風土記云駒野駒為良家駒次之其野駒在坰南者自千葉野以東至根古名北者酒酒井以東至寺臺曠原縱衡各三四十里風牧于所々官籍其牝牡消息之數皆有厲禁歲之六月吏來取之其執之處謂之込字書無此字俗用此為押入之込義有古米古无二訓此訓古米込込凡七處曰内野曰高野曰柳澤曰取香傳古之摺墨曰小間古曰矢作曰油搥是也毎込三四十歩四圍築防傍関二門及時列卒呼噪牧士數騎驅逆之或百或數十以聚一所而納諸込乃官吏監臨命牧士簡擇毛物不可者驅出之可者留之一人竿頭繫繩纏駒首又一人躍上駒背急抱其頸仆之執之盡其込而止矣牧士數十人散居村々三度栗原野有之樹不高子亦小春生夏華秋實冬和薪煎之蓋第栗屬也書同此栗一年小三度實をひす故小三度栗云又冬春の間野を焼時落栗自やける是をやけ栗と云尤為珍

成田山新勝寺

埴生郡成田村不在り不動明王二童子を祀る弘法大師の御作ふして始ハ山城國高雄山神護國祚寺護摩堂の本尊かり故不靈驗甚多く世不知る所あり昔宋雀天皇天慶二年相馬將門亂を起し時廣澤遍照寺の寛朝僧正命調伏の法を修せしむ乃この尊像を奉持し難波津より海不浮び將門が新都に程近きこの處不在て調伏の護摩を修せしむバ感應忽不顯れて明る三年の二月將門終不伏誅せりこの後僧正尊像を奉じて歸洛せむとする不忽重くして擧ぐる事能ハす且靈夢の告あるを以て永くこの地不留む乃勅して伽藍を建て高雄山の寺號ふ准して神護新勝寺と號す猶縁起不詳あり佐倉風土記云不動堂在成田曰神護新勝寺不動明王坐像長六尺弘法大師所刻本為山城國高雄護摩堂之本尊以下の文意縁起不問ト故不



印東

三十四



成田山
神護新
勝寺
不動堂

相馬日記卷三云抑坂東ふ不動明王の古靈場三所あり相模國
大住郡の大山寺と武藏國多摩郡の高幡寺とこの新勝寺と
り中畧今三所の中ふこよちう參詣人多るるハこの成田の靈
場かり

常總軍記卷廿二義長計畧千葉勢敗軍條云これハ天正十三乙酉年常陸國河内郡
岡見の岡見中務信貞の臣栗原下總守義長下總國海上郡高田
不於て同國佐倉千葉新介勝胤の將鳥居筑後村田兵衛荒海左
衛門を破り一三陣の大將荒海左衛門最勇士ふ一て是ハ荒
手といひ慎深き者ふて酒ふも酔ハざりぬるがこの軍ふ出で
一うども敵ハ潮の湧くが如く威勢強く大將鳥居村田を討ち
一かバ物とせす一て荒海が勢を取込めて火水ふかれと攻
め一かバ荒海自勇を振ひ敵を數多打取りその身深手淺手十
三處ふ受けて今ハ心身疲れて岸山の谷へ轉落ち微塵ふ爲て
敵ふ首ハとりれざれども終ふ討死一りぬる 中畧 爰ハ荒海

左衛門ハ軍散りて郎等死骸を尋ね一うども曾て知れざりぬ
る荒海ハ岸山の谷の底ふて死一ぬるふ不思議あるうか何方
よりとも無く十六七歳の童子二人來りて荒海が死せ一屍を
撫てふふ忽荒海息を吹返一蘊生せり餘ふ不思議ふ思ふ故
ふこの邊ふハ見も馴れざる最氣高き小人達かり何處何ある
所よりう來りせむひてかく我を憐みふふや更ふ不審晴れ
やのす御名を名のりせむへやと申一ぬる二童子微妙の御聲
ふて我こそ成田不動明王の御使矜迦羅制多迦の二童子あり
汝明王を信一奉る事餘人ふ超え常ふ歩を運ふ志我が普願豈
空かりむや荒海今度軍事ふ出で深手を負ふて今既ふ死すと
雖定業ふ非ず急ぎ行きて助くべ一と佛勅を蒙り來りり汝
必疑ふ事勿と仰ありて光を放ちるひて成田の方へ飛去りぬ
ひりり左衛門夢とも現とも分け難く信心肝ふ銘一御迹を伏

仰まらるふ不思議や歩行もあがりざる身の何とあう邊ありー
木の枝も取付きて立ちーがそれより歩み出て一足つゝ運び
行きにるふさーと十三所の深手おれども苦痛も更ふ無くた
どりくして道も出るか、る處も左衛門の家子堤戸平大夫牟礼
半四郎兩人いせめて左衛門殿の御死骸を犬鳥の爲ふ爲む事
も忠おきふ似り亂軍の紛おれば若やこの谷底もて死し
ふふや尋ねべーと薙薙を便ふ取付きて尋ねるふ左衛門も
巡合ひーが手を負ひー後子も無く最不審ありーうバいうあ
る事ふやと問ひにるふ左衛門感涙やるせあくーてまかくの
由物語せり兩人も奇異の事ふ思ひ且恙おきを悦び負ひまゐ
りせて荒海の館へ下總國殖生郡歸りたるが左衛門ハ太刀疵鎗
創の迹ハ十三所ありくと著きーうども只凹まらるばかりふ
て血も更に走りず痛も無かりにるハ不思議といふも愚かり

縁起云總州生實大巖寺の開山道譽上人ハ天性愚鈍しーて學
業の進み難き事を歎き嘗てこの尊し歸依し參籠持念する事
百日期満する夜の夢も不動尊持ちぬふ利劔を吞むと見て即
覺めり覺めて後これを見れば黒き血流れて床の邊を穢せ
り然して後慧解人ふ勝れ終ふ大德智人と爲りぬふとぞ佐倉風土記
不動堂條云傳小弓大巖寺開山道譽自患資鈍禱請百日夢吞
明王劔血流滿床然後慧辨邁人其袈裟今猶在而血痕黧然云
祐天大僧正御傳記古岩南卷一云團通和尚祐天剃髮して日數
も過ぎその上祐天漸寺家も馴れおーもへハ徐御經をも教
へばやと思召し浄土宗もて初學も先教ふる三部經の字數三
五字つゝ口傳も教へるへども中々一字も覺かー此の如く晝
夜教へぬふ事凡五六十日ふもありぬへども祐天いりある前
世の業因やり單の一字も覺かー中畧○この間祐天上人擯斥
を同寮の善長も諫められそれより増上寺開山堂ふ一七世
日断食籠を爲し靈告を得それより成田ふ赴く事を記す祐天

卯 胡東



よく運の極小や人里離れ一野原不て路用袈裟衣まで追剥まき剥む取りれ前後途方不くれわれ一この上又もいかなる憂目うれ不逢ふとてもかゝる大事の立願をかどう無不爲一申さむやと少もおくる、意なく遂不成田山新勝寺別當の許へぞ着きぬふ急ぎ立願の趣別當へ精く御談ありれば別當も感入あはり籠堂へ同道あり祐天悦く思召一南無不動尊誓願空からずバ哀愍納受座して余ふ智慧を授けぬへ三七日のから断食身命を盡一祈請一奉る者あり願はくハ結願の夕ふハ勿躰おくも不動尊體を現一ぬひ直ふ智慧を授けぬひ天下の名僧と爲してさびぬへ祐天が胸中を明鏡を照一驗覽有て願望成就ささ一めぬへと祈請あるぞおそろ一きの事の間一七日 祐天ハ猶も丹誠を抽祈請有り程なく二七日の願境ふもかりれば旅痕といひ芝ふて開山堂へ籠り断食致されそれより直ふ復か

くの如く断食二七日ふもかる事おれば寂早御身も疲果て只生きゝる耳の有様おれども一心ハ日ハ勇まどく岩をも通す念力ハ畏といふも餘ありかゝる處不奇やある夕方ふ年七旬とも見えぬる畏一氣ある姥出来り祐天くと聲をうけ汝さこそ身も疲果め寂早心願も成就せむ何不動納受ありざりむ二七日満ずれば速く國へ歸りぬへ其方途中不て追剥不奪ハれ一鳥目一賀文袈裟衣まで我々取返一來れり此を持て故郷へ歸り學問出精すべ一と有りければ祐天も不審晴れぬハすこハ忝き御厚恩いりある御方不て座せばかくハ憐みぬふやらむ御名慕一くハかり然れども余がこの度の立願ハ懸命の念願ありて三七日のから断食是非この日數満てずバ置くべからずよ一それまで不飢死せば本望よ必々御恤下されかと歸る氣色と見えざれば姥ハ麓へ歸りぬり暫過ぎて又出来る

ハ別當の僧祐天くと聲をうけ汝漸身と疲れより最早立願成
就せり天下の名僧と爲る事疑ふ事あるべからず三七日籠す
る不およはずこれより直た立り歸り學問出精するららば世不
比あきち智慧僧とあるべ一早とくくとの夕へハ祐天首を回り
一思ふる別當の仰うる段々の御教御情不似れどとこの度
の立願ハ命を惜ま身をかばふ如き愚おる願掛不非ず思詰め
さる事あれば必三七日籠り眞の不動の尊體を拜し智慧を授
けり終るまで中々國へハ歸るまど必御捨置下さるべ一飢死
不及ハ、本望ありと血眼不爲ての夕へハ奇や今まで晴れと
る空卒不震動雷電て岩を碎き石を飛ば一御堂の震動た、
事あらず祐天少も畏れるハず一心不亂不動を念し假令岩
不摧れても一心の竟鬼爰不止まり眞の不動を拜し奉りず
ハ體ハ微塵とありハあれと怒の皆裂くるが如く口不不動の

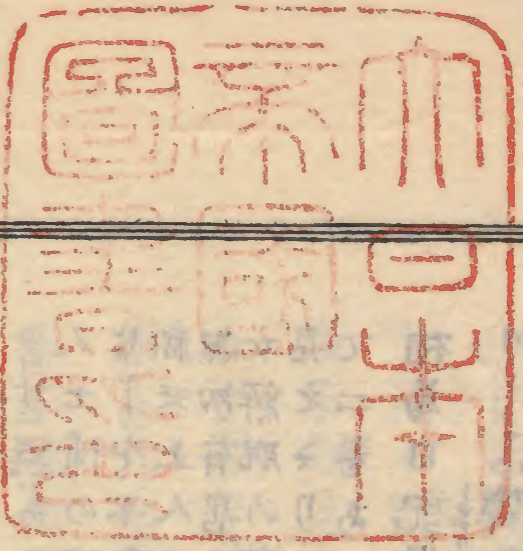
御名を唱へ動ずる氣色あかりれる猶と奇ハ今まで別當の僧
と思ひ一が卒ふその長一丈許の不動と現れ御身より火焰を
出し左右の御手不長短の利劍を提げ善哉く吾ハ是成田不動
あり汝が丹誠無二の念力類あき事を感じ今現れて示す者あ
り汝が前生の罪惡深き事二世三世死變生變りても盡る時あ
るべくらず此ハ因て今生不於ても明盲とありるあり今よ
り智慧を授かりむと思ふありハこの長短二劍の内一振吞て
藏腑の惡血を吐出し新血を生じて生改めて智慧を授くれ
この二振の中長きを吞むべきや短きを吞むべきや否や祐天
慎で曰く短きを吞もても體を破りむ長きを吞もても體を破
りむ何を吞もても體を破る不二ハ無一余長きを吞まむと大
口を開て待ちぬへハ忝も不動尊祀を唱へぬハ右の御手の長
きを情あくも祐天の口へ刺しぬへハわつと言ひて俯きその

儘息ハ絶果ふれりかくて新勝寺の別當ハ夜もほのくくと明れ
ければ祐天の事を不便と思ひ今頃ハ料身も疲れぬらむ二七
日を満てぬれば飢羸れて死せむと知れずいざ訪ひて事問ふ
べしと籠堂へ参られて祐天の有様を見ぬふ血ハ流れて體
を浸し俯伏して息断えり別當仰天し多ひしがつくと
様子を見ぬひて是も事よてハ有るまじこの籠堂へ他人の
入るべき様も無し不動の爲さしめぬふちらむと急駈の僧を
集め即座の護摩を焚き多ひ不動尊を念じて曰く祐天小僧一
念の誠心二七日ふ満つ願ハくハ祐天蘇生してこの有様を明
白ふ明らしとびぬへとせめらけく祈りぬへハ不つと息をつ
きむくと起きて別當ふ向ひ只今まで數々の御芳志生々世々
忘れまじ立願成就して眞の不動の尊體を拜し智慧を授けり
ゆありその外劔難の次第不思議の事ども一一ふ語りぬへバ

一座の僧さち感し奇異の思を爲し別當も祐天をかき撫て、
前代未聞の名僧やと感し多ふ事限あり先御利生の實を見む
とて般若經を一度讀みて聞かせぬへハ祐天これを聞取り固
より知れるが如く一字一點の差も無く語りぬふそ奇あるの
書甚誤ありしを今大率正して引きとりさて同書卷四祐天上
人土浦の浄福寺にて說法あり歸るさ法華宗徒の害せむと
せしを不動尊雷雨を起して拒ぎし事をいへり今これを畧す
祐天上人の事ハ祐天大僧正傳及び三卷山志不精し世一相
無切有居士の祐天上人一代記とて六卷あるハ戲作あり又累
女解脱の事ハ新著聞集卷五近世奇跡考卷二相馬日記卷二不
見えり死靈解脱物語と
て二卷あるハ虚言多し
相馬日記卷三云成田不動尊不詰くれさて、御前の町家ふ舎
りし隣ふ集まれる男女ども騒ぐう物いひうちさるがひ
て安寝もせさせす夜追の馬の鈴の音耳近く聞こえ櫛入りう
丑のくびぞおと言過ぐるハいとう更けぬるあるべし
不動奉納
二童子の白きとひとり難陀花

湖東

蓼太



利根川圖志卷四終

山
好
也



